

景梅九と辛亥革命

アナキスト景梅九については既にいくつかの紹介がなされている。彼が中国において最も早い時期に欧米のアナキズムを受容した人物であり、劉師培・張繼・李石曾・吳稚暉といった初期のアナキストと同時代人であること、また彼がアナキストとしての自覚を失うことなくその生を全うしたことは既に明らかにされている。

景梅九は欧化の高みから伝統中国を批判したのでもなく、国粹に身を寄せつつ近代主義を批判したのでもなかった。アナキズムの思想家として理論構築を行なったというより、より多く文人・ジャーナリストとして身を処し、アナキストであると自ら任じて実践しつつも、自らの思想・主義を積極的に運動化し、組織化することとはなかった。その点で、彼が五四運動期のアナキストとは一線を画する旧世代のアナキストであったことを示している。彼は政治的には同盟会、国民党に参画したが、五四運動期のアナキストたちにみられる労働者・農民への組織活動を恒常的に行なったわけではない。理論と実践の結合という視座は彼にはみられず、また辛亥革命から五四運動に至る時期に特徴的な倫理問題とは一線を画したところで

アナキストたりえた人物であった。

景梅九について、日本では大高巖・波多野太郎『留日回顧——中国アナキストの半生——』があり、彼の著作『罪案』の前半部を翻訳、紹介している。大高巖は『罪案』を山西・陝西地域の辛亥革命外史として、また中国人留学史として、日史交流史として評価する。波多野太郎は景梅九を評して「ロマンチストであるのが彼の真骨頂のようだ。革命家としてのきびしさやきりぎりのところが、文章からはそう強く窺えないのはそのためであろうか」と指摘している。また玉川信明『中国の黒い旗』には日中アナキスト交流史の中の景梅九についての紹介があり、嵯峨隆『原典中国アナキズム史料集成・別冊』「第九巻解題②景梅九著『罪案』」③景梅九『兵農合一評議』にも、景梅九は終生アナキストとして生きたが、「思想に殉じるが如き厳格主義的な人間ではなかった」とその人物像を語っている。

自身アナキストであり、台湾に移り住んだ李少陵は『駢廬雜憶』「一代報人景梅九」の中で、景梅九のアナキストぶりを伝えて極め

川上哲正

てリアルな人間像を描ききっているが、人民中国の成立とともに共産党に粛清されたとの事実誤認に基づく鎮魂のことはを残している。李少陵描くところの景梅九像は、強烈な個性をもった先輩アナキストへの敬意に貫かれている。

人民中国では、文化大革命後のアナキズム研究の進展にともなって景梅九に対する研究・評価も出されるようになってきた。とりわけ景克寧・趙瞻国『景梅九評伝』は景梅九の学問・思想・軍事・政治活動、更には階級性にまで言及して、現代中国の視点から彼を位置づけている。そこでは景梅九の思想が「種族革命」の視点をもち、伝統思想たる「大同」に帰一する点において、孫文の三民主義を補完する働きをなしたと評価する。だが、評価はここで終るのではなく、彼が基本的政治闘争から離脱した事実や民衆軽視、社会発展の法則性を無視した点などにおいて、国民党右派となり果てた呉稚暉・張繼・李石曾と同類とみなされる。

また蔣俊・李興芝『中国近代的無政府主義思潮』では、辛亥革命期と五四運動後のアナキズム史の中に景梅九を位置づける。辛亥革命期においては一旦三民主義を受け入れた上で、日本の社会主義者との交流を深めた事例として触れられる。一方五四運動後の一九二〇年代においては「国粹化」傾向を示す事例として取上げられる。即ち、景梅九の「無政府与孔子」などは朱謙之の「大同共產主義」や戴季陶による三民主義の「歪曲」に類似した陳腐な学説であり、「自由真諦的研究」に至ってはアナキズムを心学にすりかえようとした点で、魯哀鳴の「極楽地」同様、空疎な思弁にすぎないとされる。そして事実誤認に基づき「下品なアナキスト」と規定される。つ

まりは人民中国の側からのアナキストの墮落の顛末として位置づけられるのである。

確かに景梅九は中国における、アナキズムから共産主義への展開に乗り切れなかった旧世代のアナキストであり、アナキズムを実践的に展開するよりも、アナキスト的生を全うし、いわば心的傾向・姿勢としてアナキズムを生きたのは事実である。ここでは彼のアナキズム受容とその展開を、辛亥革命前後を中心として追跡し、アナキズムの中国的ありようを考察したい。なぜなら伝統と近代の狭間に生きざるをえなかった中国近代の知識人の生きた軌跡を思想的脈絡の中に寸断、閉じ込めることを否定し、その生のかたちを見定めたいがゆえである。

一 辛亥革命前の景梅九

景梅九は一八八二年（光緒八）三月一日、山西省安邑（現在の運城市）に生まれた。名は定成、梅九は字である。彼の祖父は貧しい秀才であり、父景丹祺も秀才となって天文・算学・地理といった実学に通じ、『天元算学』を著したという。弟景静成は兄とともに辛亥革命に参加し、民国成立後は运城潞塩督銷局長となっているが、一九一九年に四〇歳で病没している。景梅九は一四歳で李氏と結婚したが、この夫人は早世。のち二六歳で閻玉青と再婚。同志的関係を結んだ。

一八九九年、太原の令德堂書院に入学して屠梅村指導の下、史書とりわけ『後漢書』などに親しむ。一九〇〇年には谷芙蓉が創設した晋陽書院に入学、『揚州十日記』『東華錄』などに触れて民族革命

の意を強くする。一九〇一年には科挙を受験せず、山西省の代表五人のうちの一人に選ばれて京師大学堂に入學。一九〇二年に師範館に進学する。

一九〇三年の冬には第一回海外留学生として渡日し、東京帝国大学第一高等学校第二類に入學して理数系の學問を學んだ。一九〇四年には山西省出身で振武學校に學んでいた何澄とともに山西巡撫に留日学生の派遣を要請し、同年夏には五〇余名の留日学生を歓迎。早速、山西省の同郷会を結成する一方、秋瑾らと知り合い、革命を論じる。既に京師大学堂に學んでいた頃には郷容の『革命軍』などに触れ、反滿感情を高めていた景梅九は留日を契機として更に具體的革命活動に関わってゆくことになる。

一九〇五年夏期休暇中に一旦帰國し、呉樹の爆弾テロに革命の「第一声」を感得、『第一晋話報』の創刊を準備する。未完の長編小説「玉樓影」を構想するが、「人民の愛國精神を鼓舞し、いっさいを改革・進歩させ、結末は功なり名遂げて五台山の清凉寺に美しい樓を築き、同志とともに神仙の幸福を享ける」という成功物語であったという。故郷では盟友李岐山とともにアヘン吸飲と纏足廃絶を唱えて天足会を發起し、運城北大街に回瀾公司を創設した。同年一〇月、景梅九は肺患の妻李氏を残して第二期派遣の山西留日学生と共に再び日本に渡る。間もなく、一月には清國留日学生取締事件が発生し、秋瑾ら帰國組に対して殘留の側に立った。二月には自殺した陳天華を寧調元らと共に追悼する。既に八月、中国同盟会が正式成立し、一月には『民報』が発刊されたが、景梅九は谷思慎の紹介で同盟会に加入した。

一九〇六年一月には陳天華追悼を通じて知り合った陳漢之・寧調元らと『漢幟』を創刊する。ここで彼は、煙山專太郎の『近世無政府主義』を部分訳、更には「清快丸」なる短篇小説を著す。前者は原著の「第四章 虚無党の諸機關」を「俄国虚無党之諸機關」として訳出したものであり、破壊を行なうナロードニキ主義の運動を取り出している。後者は清朝滅亡の速やかなることを諷刺した短篇小説である。ここでは彼が民族主義的的革命思想に身を置いていたことを示している。

既に前年十一月、山西の知識人はイギリスの福公司在平陽等の鉞山資源を六〇年の期限付で借りる条約を結ぼうとしているのに抗議していたが、景梅九は同郷会会長として反対闘争に参加し、五月発刊の『民報』第四号に時評「清政府決意送漢人鉞産」を執筆する。一方、王用賓らと『晋学報』を創刊、のち『晋陽白話報』を発刊するが發禁処分となり、更に『第一晋話報』を発刊するが、輸入禁止となり停刊。更に『晋東』を創刊するが、財政困難により停刊となった。このような言論活動と共に、同盟会活動を通じて、六月に出獄して渡日したばかりの章炳麟と知り合い、一月の『民報』一周年記念会で通訳をつとめたり、李烈鈞ら軍人との交流を深めた。この時期、学校の宿舍を出て千代田旅館に仮寓したが、二月には友人と借家に移り、初め明明社、のち何公館と名付けて活動拠点とし、いよいよアナキズムへと接近するのである。

一九〇七年、景梅九は自覚したアナキストとしての活動を開始する。七月、秋瑾を追悼する「横海」を『第一晋話報』に執筆、一月には錦輝館での政聞社成立大会に張繼・宋教仁らと乗り込み、立

憲派の動きを粉碎して同盟会員としての活動の一翼を担ったが、この時は「無政府主義を唱えるのがちょうど高温に達した時」であつたという。既に幸徳秋水の『社会主義神髓』を読み、彼の演説に接して「社会主義をいっそう研究するように」なっていた景梅九は、夏の社会主義演説会に参加し、大杉栄にエスペラントを学びながら、張継・劉師培らの主催する社会主義講習会にも積極的に参加した。六月に計画され、八月三一日に第一回会合が開かれてから翌年六月一日日まで、一五回にもわたって連続的に行われた社会主義講習会では、九月二日、「欧米社会党の分派」と題して欧米の社会主義勢力を分類し、議会政策派を批判したり、中国の古典にみえる近似学説を取上げる。一〇月六日には張継らと登壇して演説を行なったことが確認される。⁽⁵⁾その後、張継は翌年二月にパリへ脱出、劉師培も同年一月には日本を去って上海へ渡り、所謂天義派アナキストは事実上解散するが、景梅九はそれより早く、一九〇七年末であろうか、日本を去っている。この年、友人の発刊した『国報』に投稿した「政府万能駁議」はアナキズムへ改変後に議会政治を反駁したものであり、『民呼日報』に発表した「国民之自覚」も「極端な自由と完全な自治を主張」したものであった。⁽⁶⁾

第一高等学校を卒業後、「帰国してすぐに社会革命の運動をしたいと思っていた」矢先、山東からやって来た陳幹・商震らの誘いを受け震旦公学の教員となるべく、早速、青島に向かう。震旦公学で教鞭をとるかたわら彼は労働者のストライキを指導する。その後母の病報に接し、北京を経由して既に留日時代からの旧知の仲であつた井勿幕と会い、共に太原へと向かった。故郷で李岐山らの友人

に井勿幕を紹介し、更には安邑県教育会を創設、自ら会長となる。既に西安にあつた井勿幕より陝西高等学校で教鞭とりつつ革命運動をはかるべく要請を受けた景梅九は、結婚したばかりの妻閻玉青と共に西安に就き、『教育界雑誌』に短編小説「不平」や評論「忠群論」「願学商榷」などを発表した。閻玉青が生んだ子は三日もしないうちに死に、短篇小説「溺女」を書き、夭折の子の記念とした。

一九一〇年に入ると、革命気運の高まりを実感して、軍事・兵法の書籍を読み込む一方、井勿幕・杜仲伏らと革命方略を模索する。

間もなく東京の同盟会本部からの書簡をえて、渡日を決意する。創設したばかりの河東女学堂は妻に委せて、自らは上海經由で日本へ渡った。東京では章炳麟の講義に列したり、かつて下宿していた本郷旅館などを訪ねたりする一方、宋教仁と革命情况进行分析する。宋教仁は孫文らと一線を画していた。また大逆事件で幸徳秋水らが逮捕され、「もはや日本では、無政府党员も見られないし、同盟会員も見られなくなった」「私はつまらなかつた。それから同志と革命の方略を語ろうとしても、誰がこの寂しさを察してくれよう」。⁽⁸⁾日本に止まる意味を見出せなくなっていた景梅九であった。

間もなく陝西の高等学校長周生年の招請を受けるが、趙英相が河南の鉞権闘争への協力を求めてやって来ると、豫晋秦隴四省協会を開いて代表の一人となり、北京へ行くことを決意する。朝鮮半島を経由して北京で外務部に働きかけ、河南の同志と福公司批判を展開した。

一九一一年は辛亥の年である。かつて清国留日学生取締事件に際して幹事役を務めた白逾桓と会い、旬刊誌『歲華旬記』を創刊し、

自ら茶館で売り出すが、間もなく日刊誌を企画し、二月一日、南柳巷に『国風日報』が創刊されるのである。「国風」は梁啓超らの『国風報』に対抗してのことであり、その運営は「各自能力を尽して自由にやる」方式だった。この頃、寧調元も『帝國日報』の主宰として北京にあり、国風日報館を訪ねている。『国風日報』には李烈鈞・閻錫山ら軍人の資産援助もあった。景梅九は温生才による孚琦暗殺を描いた『刺客行』、山東巡撫・山西巡撫を批判した『東西兩撫之罪状』、幸徳秋水処刑に関する『日本内閣最近之変遷』などの時局論を発表したり、劇評『戯曲説略』などを書く一方、遙かロンドンに自尽した楊篤生への追悼を『帝國日報』に書いたりする。

こうした執筆活動のかたわら、秘かに太原に走り、南桂馨・李岐山・閻錫山らと革命への準備に奔走する。一〇月一〇日、武昌起義が勃発すると、一面を空白をもって報じ、「鄂乱懷疑篇」を発表する。一〇月二九日、太原起義が勃発。遂に革命そのものの渦中に飛び込む時節が到来したのである。

二 景梅九と山西辛亥革命

山西省は北京に近接し、革命勃発となれば軍事上の重要な地域となるはずである。山西省における革命情勢は所謂清末新政によって一挙に加速化した。新式学堂の創設や留日学生の派遣が行われて、公然たる山西出身の革命派が形成されたからである。即ち一九〇三年に官費留学生として渡日した景梅九や一九〇四年に山西巡撫によって派遣された谷思慎らの初期留学生は、山西留日同郷会を組織し、その多くが革命派となった。時あたかも中国同盟会が結成され、彼

らは同盟会山西分会を組織する。彼らは「南響北応」の戦略の下、武装闘争の準備をはかった。例えば振武学校から士官学校進学をめざしていた閻錫山は孫文らの組織していた鉄血丈夫団に参加し、一九〇七年、帰国して薩拉奇で武装蜂起して失敗した王建基は体高会を組織している。一九〇九年、士官学校を卒業した留日学生が帰国するや、にわかに山西省における同盟会の活動は活発化し、山西省における新軍を事実上掌握する。この時期、イギリスの福公司からの煤鉄開掘権の回収運動やアヘン吸飲にからんで山西巡撫が農民四・五〇名を殺害した文文惨案への反対闘争においても主導的な役割を果たしたのが革命派の留日学生出身者であった。

一九一一年一〇月一〇日の武昌起義後、一〇月二日には西安でも革命が起り、山西省における武装蜂起の気運が高まった。この時、山西巡撫陸鍾琦は陝西省の革命勢力の侵入を防ぎ、太原守備の強化をはかる一方、新軍第八五標（連隊）を蒲州、第八六標を代州に派遣して太原の革命勢力の分散をはかうとした。

それに対し、一〇月二八日、第八五標の黄国梁は閻錫山・温寿泉らと協議して弾薬の到着次第武装蜂起することを決定した。同盟会員楊彭齡を先鋒隊長とし、姚以劬を起義軍司令に決定。翌二九日に武装蜂起して巡撫らを殺害、省諮議局で閻錫山を都督、温寿泉を副都督に選出して山西軍政府を組織し、黄帝紀年と八卦太極図旗を採用した。ただちに東路軍司令に姚以劬を任命して娘子関に派遣、南路軍司令に劉漢卿を任命して河東に南下させ、北路軍司令に張瑜を任命して大同に北上させた。

太原起義後、清朝は第六鎮（師團）呉禄貞を山西省に派遣して鎮圧しようとはかるが、同盟会員たる呉禄貞は張紹曾・藍天蔚らと北京攻撃を画策していた。更に参謀何遂らとはかつて閻錫山との会談を実現する。一月五日、呉禄貞らは袁世凱がもし北京に戻って大権を掌握した場合、革命の継続は危険な状態となるとの判断から、燕晋連軍を組織して呉禄貞を大都督兼総司令、閻錫山・張紹曾を副都督兼副総司令、温寿泉を参謀長とし、共同作戰を展開しようとした。ところが呉禄貞は翌一月六日深夜に袁世凱の画策によって周符麟らに暗殺されるのである。

一月十五日、袁世凱は北京入りし、山西攻略を画策する。新しく山西巡撫となった張錫銓が山西省に進攻、二月八・九日からの戦闘によって二月一二日に清軍は娘子関を占領する。革命軍内部では閻錫山の太原放棄に対して、温寿泉が太原固守を主張して対立。閻錫山は北方へ、温寿泉は李岐山・楊彭齡・景梅九らと革命軍の継続・強化のため南下を決定する。

既に晋北では武昌起義後、同盟会員李高山らが応州・山陽の県城を攻撃して犠牲となっていた。その後、北路軍総司令張瑜が大同へ進軍、それに呼応して統桐溪らが忻代寧公団を組織した。大同の同盟会員の活動は活発で、二月一日には臨時軍政府の樹立を宣言し、李德懋を都督に選出した。清朝側の攻撃に対しては運城・太原から支援にきた同盟会員王建基らの軍団も合流して、二月一日、激戦が展開。王建基らは犠牲となった。清朝側は更に増援部隊を送って増強、双方対峙すること四〇日以上に及んで、山西護理巡撫李盛鐸の調停で、一九二二年一月一七日、起義軍は一旦大同を撤退した

が、清朝側による城内略奪の報に接して、二月二七日には城内の清朝軍を排除した。

山西省の最北に位置する帰綏道と呼ばれた地区でも、武昌起義後、包頭・豊領で武装蜂起が行われたが、失敗に帰していた。だが北方へ向かった閻錫山らは、五塞で孔庚らと北伐を声明。保德より河曲へ進み、一九二二年一月三日、包頭を占領。閻錫山は秦晋蜀北伐先遣軍大都督を称し、更に一月二〇日、薩拉奇を占領したが、南北和議の成立によって民軍は前進を停止した。

晋南では太原起義後において同盟会員侯少白らが一旦武装蜂起したが、失敗していた。更に南路軍総司令劉漢卿が南下して平陽をおさえ、侯馬で清軍と戦ったが敗北し、平陽の軍政府は壊滅した。一方、娘子関を失った温寿泉らは、陝西から派遣された王一山と合流、楊彭齡を行軍都督として洪洞に到着したが、先陣劉漢卿が戦死していたため、平陽府を攻撃せず、襄陽に向かって兵糧を補給。更に南下して河津の軍事会議で温寿泉を副都督、景梅九を参謀長とし、王一山とともに陝西への連絡をはかるべく派遣した。彼らが陝西省に入ると既に井勿幕らは黄河を渡ったとのこと、温寿泉・王用賓は西安に向かって弾薬の補給を要請する。既に運城では尚徳らが民軍を組織しており、王用賓らの要請によって井勿幕が秦隴復漢軍を率いて来援し、二月二九日、運城は光復した。王用賓が河津に到着した時には、五路招討使李岐山が全軍を指揮していたが、陝西からの革命軍と連動して運城攻略を主張、北相鎮に着いた時には既に運城は光復していた。李岐山は一月七日絳州を攻略して清朝側の陳正詩を殺し、平陽へと進軍する。一九二二年一月一日、運城では張士秀

が民団總司令、王用賓が民政長となった。溫壽泉・李岐山ら、更に南京臨時政府より派遣された王北方も運城入りし、河東軍政分府が成立した。清朝側の背後をつくべく、井勿幕・王北方らは豫晋秦隴連軍を組織する。李岐山も平陽の南蒙城・史村一帯で爬城隊を組織し、襄陽で新兵千余人を招集し、平陽攻略を準備するが、南北和議後、平陽も光復するのである。

一九二二年二月二日の南北和議成立後、閻錫山は忻州に至り、袁世凱・孫文にはたらきかけて、山西巡撫李盛鐸を民政長とするこゝとで、三月一五日、袁世凱の承認を取り付けた。かくて閻錫山の山西支配が始まるのである。

景梅九が山西入りするのは、太原起義後のことである。閻錫山の要請により太原に到着、その後は山西民軍と行動をとにもするのである。一月六日、太原の都督府で閻錫山らと会見し、北京及び山西省外の情況を報告。翌日、吳祿貞暗殺の報に、一旦石家荘に向かい、頭骸なき吳祿貞の遺体と対面する。更に張紹曾に電報を發して奉天より北京を衝く計画を促し、吳祿貞が残したドイツ製の砲彈を娘子関に移送する。景梅九は娘子関より太原に到着して南北分兵の策を提案、更に軍用金の調達について「この度の革命はただ種族の政治問題を解決するだけでなく、社会問題も同時に解決すべきである」として、省内の富豪からの軍用金徴収を提案する。一月十七日、湖北軍政府にならった閻錫山は軍政府を組織化し、景梅九を政事部長に任命する。一月二〇日、民国中央政府大都督に黎元洪を任命することが決定するや、景梅九は仇亮とはかつて黄興に直言

して和議を阻止すべく、閻錫山より黎元洪への書簡を代筆し、あくまで「種族主義を發揮⁽¹⁾すべしとの内容を認める。一二月に入り、袁世凱は第三鎮段祺瑞を石家荘に派遣。これに対し、一二月五日、景梅九が代筆して閻錫山より段祺瑞に対して「種族革命」側に立つ書簡を送っている。一二月七日には北京より袁克定の意を汲んで山西革命軍との意志疎通をはかるべく、劉美容が太原に到着する。劉美容は袁世凱の共和承認を前提とした山西革命軍との取引にやって来たのである。景梅九は袁世凱に共和を勧める書簡起草する。しかし二日後には第三鎮の曹錕が娘子関を攻略する。かくて景梅九は「袁奴は遠攻近攻を行なつて人を欺くこと甚しいものがある。ただ一戦あるのみ。後退すべきではない。勝てば長驅して北京に至り、敗ければ南北に分兵して別に計画をたてるのがよろしい」と述べて、閻錫山を促す。しかし娘子関は占領され、二月一日、太原で緊急會議が召集され、分兵が決定される。二月二日、閻錫山は北上した。溫壽泉らは太原に踏み止まろうとするが、守りきれず、太谷より合流した李岐山らと南下を決定。景梅九は学生隊を率いて殿軍をあずかった。二月二五・六日の河津での會議により、參謀長に就任、革命軍を改編して国民軍とし、陝西省の革命勢力と連合、かつ軍備の補強をはかるべく、陝西に行くこととなる。一月三日、蒲州で既に井勿幕は河東に向かったとの報を受けて運城に着くと、井勿幕と再会し、妻閻玉青とも再会する。翌日、女學堂で陝西革命軍との連帯集會を開き、景梅九は軍需局局長に推される。一月七日、李岐山が絳州で秋瑾を密告した陳正詩を討ったとの報を受け、更に平陽攻略を画策する李岐山と行動を共にすべく、絳州へ向かう。景

梅九は琴棋書画詩酒花の風雅にひたる余裕もなく、新兵を募り、兵糧の調達と軍備補強のために奔走する。子の景崇友も僅か一二・三歳にして新兵となった。蒙城に駐屯する李岐山を訪ね、「他人は皆我を捨てて去ってしまったも梅九独り来てくれる」と喜ぶ李岐山に對し、景梅九は共和は間もなく達成すると予測する。

果して二月二日、清朝は滅亡し、共和政体が実現した。景梅九は史村で七律一首をうたう。「国体忽伝して共主と成り、江山此れ従り中華に属す。五千年史、新例を開き、四百兆人、故家を憶う。哲士の魂、平等の夢を榮め、英雄の血、自由の花を灌ぐ。睡獅一吼、今方に醒め、独立せし崑崙、正睽を望む」と。

三 辛亥革命後の景梅九

破壊から建設へと時代は展開する。景梅九は李岐山と共に運城に帰還し、陝西革命軍に清軍との停戦を働きかけるべく、陝西入りするが、既に停戦はなされていた。運城に戻り、邵修文を招請して法制の整備に努めたり、『河東日報』を創刊して婦人解放を提唱し、天足会を組織する。四月、閻錫山の要請で太原に行き、「無政府党が道台となるのは、やはりおかしい」として任官を拒否するが、各省に稽勲局が設けられると、実官とはみなさず、山西稽勲局局長を引き受けている。景梅九は革命のために死んだ烈士を紀念・顕彰することを自らに課したのである。

既に国風日報館は北京の南柳巷より順治門大街に移って運営されていたが、稽勲局の仕事が一段落すると、景梅九は北京入りし、旧友を訪問し、「重来燕市之感」を執筆する。

その後太原に戻り、『山西民報』に閱与し、連載小説「搗乱党」を執筆したり、黎元洪による張振武・方維暗殺を批判する「黎元洪八十八址」を書く。これに對して黎元洪は批判撤回を迫って叙勲をちらつかせたりした。

夏には山西大学堂で社会主義を概括する講演を行なったが、アナキズムを「宣伝はしても連絡はせず」の立場をとって、同志の拡大に努めたりしなかった。そのことを悔いているが、ここでは景梅九が辛亥革命後の運動論をもったアナキストとは異なる立場にあったことが了解される。彼が当時深く関心を寄せたのは男女平等問題であったから、丁度北京からやって来た陳心の女權論に刺激を受けて、女子の知識を高めるべしとの見解を「思高身長説」として執筆する。また女子が職業に就くことによって自立すべしとして、太原第一女工廠を創設する。そのために女子教員を招請して縫紉機を購入、労働力重視による利益分配を実践する。いわば資本家と社会主義的実践とを同時的に担ったのである。

一九二二年八月二五日、中国国民党が成立し、景梅九も参加する。九月には孫文が山西を訪問する。景梅九は孫文一行を石家荘に迎え、呉禄貞殉難の地を訪れる。更に娘子関の激戦地を案内して太原に同行する。九月一八日から二一日まで、孫文の歓迎会・講演会が各所で開催される。孫文の山西訪問は国民党山西支部の要請に応えたものであったが、孫文はこの時、「山西内部の不協を憂慮」⁽¹⁷⁾している。

一月に入り落馬事故が愈えた景梅九は江西にいる杜仲伏からの手紙により、妻閻玉青らとともに南下する。車中、「衣食住行の四者が満足すれば、幸福であり、もしも人々が平等にこの四種の要素

を享受することを求めるならば、先ず金銭を廃止して無政府共產を
 実行すべきだ⁽¹⁸⁾」など同行の李閔臣に社会主義を語ったりしている。
 南昌に着くと江西都督となった李烈鈞らと会見、北方の情況や袁世
 凱の野心を語り合い、二次革命を期する。

南昌に二〇日程滞留の後、景梅九は南京から上海に出て、『民立
 報』の于右任らと会見する。かつての同志井勿幕とも会い、ドイツ
 語を学びドイツ留学を志していることを知る。更に杭州を訪ね、西
 湖畔の岳飛の墓や秋瑾を記念する秋社などに遊ぶ。上海に戻ると、
 寧調元が訪ねて来たので、李烈鈞の秘書に推薦する。更に黄興を訪
 ねたりもしている。

この頃、景梅九は衆議院議員に当選との報に接し、気が重く「政
 法地獄に堕ちてしまふのだろうか。できない。北京に行ってその上
 で話をしよう⁽¹⁹⁾」と考えたりするが、上海の同志たちは彼の心情に無
 理解であった。その後「辞意を打ち消して議院の傍観者となるこ
 と⁽²⁰⁾」を決意するが、当時アナキスト劉師復は『民声』誌上で張継が
 国会議員となったことを批判しており、これに対して景梅九は、動
 揺し、「無政府の三字を忘れられない⁽²¹⁾」心情を吐露する。景梅九は
 六不会にも参加せず、社会的声明を発していないがために、劉師復
 の批判の対象とならなかったと自己弁明し、理論と実践の結合をは
 かる新しい世代のアナキストとは一線を画したのである。

上海より南京・天津を経由して北京に到着した景梅九を待ちうけ
 ていたのは、李岐山・張士秀が「河東独立」を企てたとの罪名によ
 って閻錫山に逮捕されたとの情報であった。景梅九は救出活動に奔
 走するが、二人は各々一二年の刑に処せられている。彼は「十億二

哀」を書いて、革命烈士を追念する。

一九一三年三月二〇日、宋教仁が暗殺された。景梅九は「民国大
 乱が起った。革命をやり続けよう⁽²²⁾」と決意する。『国風日報』に対
 して袁世凱は社員裴子清と郭究竟に逮捕令を発して弾圧するが、景
 梅九は「もし議員を逮捕できないというなら、議員職を辞して応じ
 よう⁽²³⁾」との批判文を袁世凱政府に送り、釈放をかちとった。五月、
 山西省では袁世凱を擁護する閻錫山とそれに反対する勢力との対立
 が顕在化する。景梅九は太原に帰り、煩悶することしばし、討袁を
 決意する。北京に出て杜仲伏と南方の討袁に響應すべく、京漢鐵道
 をおさえる計画をたてるが、娘景清秀の病を知って、独り太原に帰
 る。九月、二次革命は失敗し、一〇月、袁世凱は正式大統領に就任
 した。僅か一一歳の娘も死んだ。景梅九は前途への希望を託しつつ
 「菩薩蛮」をうたい、娘を鎮魂すべく「哭女祠」をうたった。自らの
 革命運動を罪過とみなして名付けられた『罪案』は郭朗清のすす
 めによって書かれ、翌年四月、初版本が出版されるのである。

その後の景梅九については多くを触れない。彼の反袁活動
 は山西・陝西で継続され、護国軍に加担した。一九一六年一月には
 西安で逮捕され、北京軍警執法処に入獄し、六月の袁世凱の死まで
 獄舎につながれた。出獄後、国会議員に復帰し、『国風日報』に関
 わり、『罪案』の続篇を書いている。一九一七年七月の張勳復辟に
 際しては、『国風日報』誌上で批判を展開し、広州護法軍政府議員
 となる。護法運動の失敗後は孫文に従って南方で活動し、一九一九
 年五四運動の時期には山東・内蒙古で反軍閥闘争を展開した。一九

二一年には上海で『国民日報』の創刊に関わり、一九二二年六月の陳炯明の反乱に際しては孫文に従っている。一九二三年二月には大元帥府高級参議となり、一〇月に曹錕が総統となった時にはそれに反対票を投じている。一九二四年九月の北京政変後には、国民軍第六軍軍長となる。一九二五年三月、孫文の死後、第三次『国風日報』に関わり、李石曾・吳稚暉らと北京世界語専門学校を創設する。一九二七年四月の反共クーデター後、蒋介石から中央委員就任の招聘を受けるが、拒否し、一九二九年には反蔣活動に従事し、一九三〇年の馮玉祥・閻錫山の倒蔣運動にも参画する。一九三四年二月、国学社を創設、六月には『出路』を創刊し、抗日救国を訴える。一九三六年一〇月、共産党系の西北各界救国連合会が主催した魯迅追悼会に出席する。一九三七年には共産党系地下組織の援助で、第四次『国風日報』を出版する。一九三八年には山西抗日游撃縱隊の組織化を支援し、毛沢東・郭沫若らと交流する。一九四五年、西安の新風文芸社社長となり、一九四六年、第五次『国風日報』が国民党特務機関により破壊されたが、抵抗を続けた。一九四八年一月には国民党革命委員会に参加し、中央監察委員となった。一九四九年の共産党による西安解放後、『国民日報』を停刊し、共産党中央からの招聘には病弱を理由に辞退した。その後は一九五〇年に西安市人民代表、一九五一年に西北行政委員会参事、一九五五年に陝西省首席政治協商會議委員となったが、一九五九年三月一〇日、七七歳で西安に没したのである。

四 景梅九とアナキズム

景梅九はどのようにアナキズムに接近したのであろうか。彼自身の証言に従えば、一九〇七年のこと、「今夜、錦輝館で社会党が演説会を開くからいっしょに聴きに行つて見聞を広めよう」との友人の誘いで演説会に参加し、幸徳秋水の「演説を聴いてから、社会主義についていっそう研究するようになった」⁽²⁵⁾とのことである。しかも「この主義は三民主義のなかの民生主義であり、同盟会の主義主張に反しないから」⁽²⁶⁾社会主義研究に打込んだというのである。

当時、日本の社会主義者たちの理論闘争は激化していた。即ち幸徳秋水が一九〇六年六月、アメリカから帰国して「世界革命運動の潮流」を講演し、「革命の運動か、議会の政策か」の二者択一を迫り、更に一九〇七年二月、『平民新聞』第一六号に「予が思想の変化」を書いて直接行動論を提唱、同月の日本社会党第二回大会で論争してから、『平民新聞』は廢刊、日本社会党も結党禁止処分を受け、幸徳秋水らの硬派と片山潜らの軟派に分裂する。そして八月二〇日には片山らが社会主義同志会を、九月六日には幸徳らが金曜会を結成して、前者が「第二インターナショナル綱領主義・議會政策」、後者が「クロボトキン主義・アナキズム」を唱えて完全分裂するのである。⁽²⁷⁾

景梅九が初めて幸徳秋水の演説を聴いたのはいつのことであったか。一九〇七年二月一七日、日本社会党第二回大会は錦輝館で開かれているが、午後一時半より開始とのことで証言に符合しない。また同年八月初旬に社会主義夏期講習会で幸徳秋水が「法律論・道德論」を九段下ユニバサリスト教会で午後七時から講演しているが、景梅九もこの講演内容について後のものと記録しており、明らかに

初めて聴いたものではなかったことが了解される。しかも竹内善作の談話によれば「九段下のユニテリアン教会で開かれた」講演会に「中国革命党」の同志が七、八名出席しておった⁽²⁹⁾が、その中に景梅九が「来ておった」とあり、景梅九はそれ以前に幸徳秋水の演説に接していたと考えられる。となると、一九〇六年一月一八日の幸徳自筆記事にみえる「錦輝館に演説会を開く。十名の弁士中八名中止さる⁽²⁹⁾」の記事が気懸りではあるが、判然としない。しかしこれにせよ、景梅九にとって幸徳秋水から受けた直接的影響の大きさは彼自身の民族主義思想を改変せずにはおかなかったのである。

同盟会の内部においては一九〇六年一月の『民報』一周年の祝賀会を過ぎた頃から孫文一派への批判の聲が高まり、その中心にあった章炳麟・張繼・宋教仁・白逾桓らのうち、張繼らは北一輝を紹介して幸徳秋水と知り合い、交流を深めていった。しかも張繼らが「アンチ孫文の活動を精力的におしすすめたとき、孫文批判の論理としては、おおむねトルストイの見解が踏襲された⁽³⁰⁾」ともいわれる。確かに中国の現実、長期的皇帝支配下にあった中国に西欧の近代の政治原理をストレートに持ち込むことへの疑義といった「トルストイの見解」は『天義』を出版し、社会主義講習会に結集した人々の共通認識でもあった。

人脈の点からみると、山西の革命派の中で南桂馨は日本アナキストと交流し、劉師培に共鳴していたとの証言を残しているが、景梅九には劉師培に言及するところがなく、張繼に対しては同志的心情を吐露しているふしがある。更に章炳麟・宋教仁や宮崎滔天との関係はあるが、当時の同盟会の主流であった広東の革命派との直接的

つながりは稀薄である。とすると、景梅九は『民報』の編集者としてあった張繼らとの関係の中でアナキズムに接近したと考えるのが妥当であろう。それゆえ、当時の景梅九は孫文の民生主義イコール社会主義とみなしていたとは考えられまい。⁽³²⁾

景梅九のアナキズム受容はどのようなものであったのだろうか。一九〇七年九月二日の社会主義講習会での彼自身の演説を先ず取上げてみよう。⁽³³⁾

景梅九は欧米のアナキズムをそのままに祖述するより、中国の伝統学術の中にアナキズムの観点を検出しようとする。例えば『礼記』の「礼運篇の『大同』は「共產主義と無政府主義の神髄」であり、「老・莊・列・墨の諸子の書物」は「社会主義とびつたりあうものがある」わけであり、『孟子』の「神農の言を為す者有り」は「無政府主義」である、といった具合に、自在にアナキズムと中国の古典を結びつけるのである。景梅九にあっては、自ら認識しえた心理を憶することなく古典の中に見出す風があった。だから「無政府主義と老子の学説を融合させて、一冊書きたい⁽³⁴⁾」と思ったりもしたのである。この態度はアナキズムを伝統思想と切斷する立場とは全く異なるものであった。景梅九が創刊に加わった『晋業』の宣伝広告を取りあげてみても、「本社の大主義は、一に国粋を發揚し、二に文明を融化し、三に自治を提唱し、四に実業を奨励し、五に路鉞を收復し、六に蒙盟を経営す⁽³⁵⁾」とあるように、「国粋」は否定すべきものではなかったのである。

民国成立後間もなく、山西大学堂で行なった景梅九の「社会主義概説⁽³⁶⁾」はアナキズム思想、とりわけ「無政府共產主義」の立場から

の社会主義論である。

先ず「(一) 総論」では社会主義が人類始まって以来のものであり、自由・平等・博愛が本来、宇宙・自然の法であるにもかかわらず、不平等な社会となっていたがゆえに、世界に無数の革命が生まれた。近代におけるフランス革命より辛亥革命に至るまで、その原因は種族・政治・経済上の階級対立によるものなのだ、として、三民主義に言及する。

先に吾が国の革命家は民族、民権、民生の標幟をうちたて、以て国民に号召し、国民をしてその下におもむかせたが、所謂民生主義は即ち社会主義なのである。今日迄に五族共和、胡越一家、四民平等、民族民権の両問題はすでに目的を達成したようである。しかし民生主義は僅かに糸口をつかんだだけで発展していない。その原因は二つある。その一は中国の生産事業がまだ発達しておらず、貧富の差が欧米各国の甚しきには及ばないがためであり、その二は中国の学者が多く政治改革方面に心を留めてはいるが、社会経済方面には多く意を用いていないがためである。

と述べて、中国が社会主義に対する認識を深めていない事実を指摘し、民生主義を社会主義と規定する。ここではアナキズム的傾向は述べられていない。しかも革命政府が社会主義をして此の度の革命の副産物とせず、社会政策の近道として利用することができるはずだ、とする。景梅九は孫文の民生主義を社会主義として承認しているのであって、決して欧米社会主義との違いを正そうとはしないのである。

次いで「(2) 社会主義之起原」では、マルクスの『資本論』と

『共産党宣言』を高く評価し、社会主義の淵源を「貧富の差」に求め、また「貧富の差」を「資本の専制」に求め、「資本の専制」を「産業の革命」に求める。そして産業革命が社会主義勃興の間接的原因であり、社会道德の不進化为原因である、とする。

「(3) (4) 社会主義之進歩」ではサン・シモン・フーリエをあげて共産主義学説の源流とみなし、「理想的社会主义」と規定し、更にルイ・ブラン・ラマルク・マルクス・バクーニンをあげて、とりわけ、マルクスの『資本論』を社会主義理論の最高峰とし、バクーニンの出現によって社会主義は「奇異なる進歩」を遂げた、とする。

「(5) 社会主義之極端」ではクロポトキンをあげ、暗殺とゼネストといった闘争手段がクロポトキンの主張するものであることを紹介し、総同盟罷工が最大の闘争手段であることを主張する。更にトルストイの「支那人に与ふる書」や「非戦論」をとりあげ、「消極無政府主義」の代表とみなしている。

「(6) 結論」では社会主義の目指すところが「進んで世界の真正の平和を求め、社会の真正の幸福を満足させ、理想の高尚なること、主義の純潔なること、これ以上のものはない」と評価し、「社会主義を奉じる人」は「その精神は宗教家のようであり」「社会主義者は地上に理想国を創造しようとする」ものであると称賛する。また中国の古典を列挙しつつ、その精神の社会主義との重なりを整理している。即ち、孔子の「礼運」、許行、墨子の「非攻」、老子の「闢聖」、莊子の「斉物」、張子の「西銘」に東西世界の符合を読みとらうとする。社会主義はスイス・フランスでそれが実行され、東アジア

アでも太平天国、琉球に実例を見ることが出来るはずだが、「世人は察せず、乃ち邪説とみなしている」のが実状だが、弱肉強食の世界が続けば、人類が減んでしまふ、と警告する。

社会主義こそが人類救済の道であると確信する景梅九は、自由・平等・博愛を分析するにあたって、「不自由は不平等に因り、もし富が貧を欺けば貧者は不自由となり、貴が賤を凌げば賤者は不自由となり、長が幼を圧すれば幼者は不自由なる。不平等は不博愛に因り、富が貧を愛さないがゆえに貧を欺くのであり、貴が賤を愛さないがゆえに賤を凌ぎ、長が幼を愛さず、幼を圧する。博愛とは無富、無貧、無貴、無賤、無長、無幼にして全て平等の地位に立ち、各々その「人」の天職を尽くし、互いに親愛の關係になってこそ自由・平等の真の姿といえるのだ」とする。かくて自由・平等・博愛という市民革命の精神は景梅九によってアナキズムの理念へと再解釈されるのである。

こうした方法論は彼の著作に自在に展開するのであって、一九二二年二月、『自由』に執筆された「自由真諦研究」³⁷⁾においても、独自の字義解釈によって「自由」を捉えようとする。「上篇」では、先ず「自由」における「自」は自己であり、「由」は随従であり、「自由」は即ち「由自」のことである。即ち「自己に随従して、自己以外のものに随従しない」ことであり、「自」は「仏説の自性と同じ」とみなす。彼にとって不自由の極まった人とは、「獄囚・奴隸・兵丁」がある。「獄囚」には帝王の宮廷、婦女の三従も入る。「奴隸」にはアメリカの黒人奴隸、ロシアの農奴や富貴な家の下僕だけでなく、大臣・宰相・小官僚らの役人や金銭の奴隸たる資本家

も奴隸なのである。「兵丁」は兵營に身をささげ、上官の命令に服従するが、日本兵に至っては天皇への絶対服従を強いられると説く。世界は実に不自由人に満ちているのであって、ソ連でもレーニンが「平民專政」「工券制度」を施行したが、前者の官僚主義化、後者の資本主義化が進行していると指摘して、ソ連批判を述べるのはアナキズムの立場からのものである。

下篇では「自性」について、中国の古典、とりわけ『莊子』を例証として説いてゆく。即ち「逍遙遊」の主旨は「人物大小は違ふものだけれども各おの任性自得の楽しみがあることを表現している」ものであるとする。また「齊物論」の精神は「吹たつるものは万ざまにして同じからざれども、其れをして己に自わしむ」³⁸⁾に表されるとし、「自」は由であり、「己」は自であり、自己は由自である。

由自は、すなわち物類が各おの自由を得ることである」とする。「内篇」のみならず、「外篇」の「駢拇」「馬蹄」「胠篋」「在宥」といった諸篇を取り上げて「自性」に従うことを是とし、作為を否定する論を展開する。例えば「駢拇」の「三代より以下は、天下、物を以て其の性を易えざるは莫し。小人は則ち身を以て利に殉じ、士は則ち身を以て名に殉じ、大夫は則ち身を以て家に殉じ、聖人は則ち身を以て天下に殉ず」³⁹⁾を取り上げて、物によって性を易える事例とし、それゆえ「事業は同じからず、名声は号を異にするも、其の性を傷い身を以て殉と為すに於いては、一なり」⁴⁰⁾となるのは当然であるとする。それを打開するには自己自身による他ないとして「吾が謂わ所る聰とは、其の彼れを聞くを謂うには非ざるなり。自ずから聞くのみ。吾が謂わ所る明とは、其の彼れを見るを謂うには非ざ

るなり。自ずから見るのみ」⁽⁴¹⁾を引用する。こうして、『莊子』諸篇にみえる無為自然の境地を展開し、「自由とは君たち自身が自らたもつものであって、外に求めるものではない」とし、政府・政治・法律を拒否し、「自性」を主張し、それこそ「絶対自由」であるとす。そして、現在できうることは「不自由な環境の中にあつて、極力自性を保持し」「不自由な環境を打破しようと努力して、人々に各おのその自性を回復させる」ことが大切なのだ、と説く。自由を説くにあたつて、景梅九は老莊思想のみならず、『論語』『中庸』『列子』『西遊記』や仏教者の言をも取り上げる。ここに中国の古典がアナキズムを契機として再解釈されるのである。

人民中国の評者はこの「自由真諦研究」を「心」「性」を用いてアナキズムを改造したもの、伝統文化が深く醸しだすものによつてアナキズムと心性説を融合した、と唯物論の立場から批判を下す。アナキズムを反動的政治思想と把える立場からの批判であるが、果して、中国の古典を援用するがゆえに、アナキズムの国粹化イコール保守化、あるいは退嬰の個人主義化といえるのかどうか。ここではアナキズムの中国的土壌における在りようを示す典型として把えることが妥当であろう。しかも五四運動期における実践的アナキズムとは異なり、個人主義的アナキズムであつたことは否めまい。

註

(1) 著者は景梅九と景耀月(一八八三—一九四四)とを間違えたものと思われる。景耀月は一九二三年、曹錕の賄賂五〇元を受けとり、「猪仔議員」に墮落して南社を除名された人物で、景梅九とも親交があつた。

(2) 『罪案』五七頁。前半部の訳は大高巖・波多野太郎『留日回顧』によ

る。

(3) 同右、八六頁。

(4) 同右、七三頁。

(5) 社会主義講習会については、永井算巳の「社会主義講習会と政聞社」(『東洋学報』第五一卷)、蔣俊・李興芝「中国近代の無政府主義思潮」などに、詳細な研究がある。

(6) 『罪案』九五頁。

(7) 同右、九六頁。

(8) 同右、一七〇頁。

(9) 山西辛亥革命については、主に劉存善「山西辛亥革命紀事」(『辛亥革命在各地』)及び山西省政協文史資料研究委員会編「閻錫山統治山西史実」を参照した。

(10) 『罪案』二二六頁。

(11) 同右、二二八頁。

(12) 同右、二三五頁。

(13) 同右、二七四頁。

(14) 同右、二七五頁。

(15) 同右、二九八頁。

(16) 同右、三一八頁。

(17) 羅家倫主編『国父年譜』上冊、四八六頁。

(18) 『罪案』三二八頁。

(19) 同右、三四〇頁。

(20) 同右、三四七頁。

(21) 同右、三四八頁。

(22) 『罪案・附録』三頁。

(23) 同右、四頁。

(24) 『罪案』七〇頁。

(25) 同右、七三頁。

- (26) 同右、七三頁。
- (27) 西尾陽太郎『幸徳秋水』。
- (28) 竹内善作「明治末期における中日革命運動の交流」(『中国研究』五、七五頁)。
- (29) 『幸徳秋水全集』第九卷。
- (30) 森時彦「民族主義と無政府主義」(小野川秀美・島田虔次編『辛亥革命の研究』、一六五頁)。
- (31) 南桂馨「山西辛亥革命前後的回憶」(『辛亥革命回憶錄』五、一四七—八頁)。
- (32) 嵯峨隆『原典中国アナキズム史料集成・別冊』「第九卷解題」八一頁では「当時の中国アナキズム運動、とりわけ東京グループのそれが、同盟会内部の孫文のリーダーシップに反対する動きと呼応したものであることを考え合わせる時」「景梅九の説明は矛盾した印象を与える」として、「民国成立以後に顕著となる彼と孫文との同志的関係を反映したもの」とする。
- (33) 『罪案』八〇—八一頁。
- (34) 同右、一二〇頁。
- (35) 『天義』第二冊第二冊合冊。
- (36) 『罪案』三〇六—三二九頁。
- (37) 葛懋春・蔣俊・李興芝編『無政府主義思想資料選』五〇四—五一四頁。
- (38) 福永光司『中国古典選12・莊子・内篇』六二頁。
- (39) 福永光司『中国古典選13・莊子外篇上』四七頁。
- (40) 同右、四七頁。
- (41) 同右、五四頁。
- (42) 蔣俊・李興芝『中国近代的無政府主義思潮』三二七—三二九頁。